
自称宇宙人の休日～餌は与えないで下さい～

霜月璃音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自称宇宙人の休日〜餌は与えないで下さい〜

【Nコード】

N2216L

【作者名】

霜月璃音

【あらすじ】

私の妹は、自称宇宙人。これは、そんな彼女に捧げる一日日記。

注：ほぼ実話です。名前が仮名である以外は……。

朝四時四十六分、目覚ましが鳴る。宇宙人の一日が始まる……。
バンッ！

いささか乱暴に、鳴り続けるそれを止める音。それから、再び布団にもぐる音……。おいおい、大丈夫なのか……。？しばらく、何の物音もしない。仕方なく、起こしてやろうと思ったその時だった。
バンッ！

床が抜ける程の、大音量。震源地は、宇宙人の部屋……。そう、彼女は文字通りベッドから飛び起きたのだ。それで、まだ半分夢見心地だった私も完全に目を覚ます。返せ、私の寿命……。おそらく、三年は縮まった。彼女は、近くのコンビニに早朝アルバイトに行っていた。その後、寝ている周りはお構いなしという様子で慌ただしく準備をする。

ガチャ、ボタン！カチャリ。
どうやら、行ったようだ。鍵を閉めて行くところだけは褒めてやりたい。そして、こんなに早くにアルバイトに行くという点も……。ホウ、と一人で溜息をつく。どうやら、二度寝できそうだ……。

私の妹は、自称宇宙人だ。……自称プロサーファーとどちらが性質が悪いのだろうか。いや、そこは言及しないでおこう。比較対象も少し古い気がするし……。なんでも、子供の頃に親の宇宙船から川に落ちてしまったとか。そしてそれを拾ったのがうちの両親だとか……。彼女は夢見ている。いつか宇宙から本当の両親が迎えに来ることを……。まるでどこかで聞いたような話ではないか。日本の物語に、そんな話があったような……。まあ、彼女は竹から生まれた訳ではないが。

そんな彼女の好きな食べ物、お菓子全般。地球の甘味は、宇宙人の口にも合うらしい。もっとも、彼女を宇宙人と仮定するならばの

話だが……。後、エビはアレルギーらしい。蕁麻疹が出るという。

午前十時、アルバイトから宇宙人かのじゅが戻って来た。最近お気に入りだという抹茶オーレを飲みながら、昨日買って来たばかりの新刊の漫画を読む……。その傍らには、いつも甘いお菓子。なにしろ、月に一万円近くはお菓子代に消えているという。それでこの細さなのだから……。いやいや、恐れ入りました。

「食べたいー？」

彼女は、隣で泣く泣く大学のレポートをやっている私に向かってお菓子の箱を差し出した。

「……食べる。」

そう言っただけで私がその箱に手を伸ばすと、すいっとその箱を彼女は引っこめた。

「あげないけどね。」

「そんなケチなー！」

恨みがましい目を彼女に向ける。すると、彼女はニッコリと笑ってその箱を再び差し出した。今度は引っこめられることはない……。

「ありがとう。」

「百円でいいよ。」

ゴックン……。驚いて、ほぼ丸のみ状態。どうやら、宇宙人と言う人種は守銭奴なものらしい。

「食べてから言うなよー……。」

「冗談だつて。」

そんな話をしている間に、箱は空っぽ……。え、食べるの早くない？ さつき、まだ半分位入ってたよね……。？……。どうやら、宇宙人は早食いも得意(?)らしい。ちゃんと噛まないで、ね？

ゴソゴソ……。

彼女がアルバイトに行くのに持って行った鞆をまさぐる。そして……。え、嘘？二個目なんか出て来ちゃう訳？その鞆は四次元ポケットかよ……。？そして啞然としている私の目の前で、彼女は二箱目

にも手をつけた。えええっ？まだ食べるのっ？宇宙人、恐るべし……。どうやら、彼女は胃袋にブラックホールを飼っているらしい。さすが、宇宙人……。ハッ、感心している場合じゃない、止めないと……。

「た、食べ過ぎじゃない？未央……？」

霜月未央、それが彼女の名前だ。彼女は私には目もくれず、漫画のページを繰りながら答える。

「いいって、未央、食べても太らないから。」

それは胃袋にブラックホール説を容認しているということですか、未央さん……。？密かにそんなことを考えるが、言わない。彼女は、私より五センチも背が高い。その上、昔空手もやっていたのだ。そんな彼女に睨まれたら、武道の経験もない私は、蛇に睨まれた蛙状態……。友達曰く、お姉ちゃんという生き物は、もつと威厳があるものだから……。いいんです、私は。お姉ちゃん失格なのです……。そんなことを考えて、密かにブルーになる。

午後十二時三十分、昼食をとる。宇宙人はすごい。

「おかわりー。」

え、今の、冗談……。？しかし、本当に彼女は立ち上がった。そして、フライパンの蓋を開けた。今日の昼食は、チャーハンだ。そして、自分の皿にそれを盛り付ける……。え、嘘でしょ？それ、さっきよりも量多くない……。？それに、お菓子あれだけ食べてたよね……。？まだ入るの……。？胃袋にブラックホール説、確定……。裏付けが取れました。

午後一時、宇宙人は午睡の時間に入る。そのまま、夕方までは起きて来ない……。まあ、仕方ないことだとは思う。朝早くからアルバイトに行っているのだから……。ただ、敢えて文句を言いたいことが一つ。朝起きたら、豆電球を消しなさい。わかったね？

午後五時、彼女がようやく起きて来た。開口一番。

「お腹空いたー。」

「……は？聞き間違い、だよな……？」

「お母さん、お昼のチャーハン残ってる？」

「あ、残ってるよ。片付けちゃって。」

いや、お母さん、待って下さい。宇宙人に餌を与えないで下さい。

彼女はずっと寝てたんだよ？それなのに、あのお菓子とかチャーハンとかを全部消化しちゃったって訳？それに、もう一時間位で晩御飯だよな？

「わーい、いただきます！」

私の心の叫びが、届くはずもない……。良い子、善良な市民の皆さんは、決してマネしないで下さい。これは、宇宙人^{かのしよ}だからできることです……。

そんな彼女も、夕食の手伝いはしてくれる。箸を出して、盛り付けが終わったおかずを順番に運んでくれる。それから、ドツカリと座り込む。

「早く食べようよー！」

あ、うん。もう少し待ってね。まだ出さなきゃいけない物がいっぱいあるでしょ？ほら、サラダのドレッシングとか……。小さく溜息をついて、それを両手いっぱい抱えて私も席に着く。うちの家、ドレッシングの種類多過ぎ……。

「未央、わかめ増量ー。」

そう言っただけで彼女は、カットわかめの袋をつまんで来た。そして、わかめスープに一つかみ……。え、もういいでしょ？え、もう一つかみ……？それから、何もなかったかのように。

「いただきますー。」

私と弟が唾然としている前で、彼女のスープはどんどん黒く染まっ
て行く……。カットわかめが膨張しているのだ……。そして、彼女の
のスープにはこんもりとわかめの山……。え、それ、確かスープだ
ったよね……？

「未央、それ、スープ残ってるの……?」

恐る恐る、疑問を口にする……。

「え? だってスープでしょ?」

いや、うん……。言わないよ、別の物に見えるなんて、そんなこと……。宇宙人の口には、わかめも合うらしい……。うーん、実に奥深い生き物だ……。

その後、私と彼女は一緒に動画サイトを見る。最近ハマっているアーティストが一緒なのだ。そして、二人で談義をする。

「こっちの曲の方がいいよー。なんかこっち、切ない感じじゃない?」

「えー、だってそれ、ノリがさあ……。語りも長いし。こっちの方がいいよ。この繰り返し感が……。」

「あ、じゃあこっちの曲は?」

「えー、それよりこっちの病んでる感じがいい。自分でやったのにつて感じじゃん!」

同じアーティストなのに、好きな曲はあまり一緒にはならない……。なんとも言えない。一応姉妹んだけどなあ……。あ、そうか。私は宇宙人じゃないんだ。そんな風に自己解決をしている、今日この頃……。

そして。午前零時、私は部屋の電気を消す。就寝時間なのだ。しかし、宇宙人かのじよの部屋からはまだ明かりが漏れている……。時々、寝る前に聞いていた曲が聞こえてくることがある。今日は、彼女が病んでる感じがいいと言っていた、あの曲……。語りの部分だけ、やけに力を込めて。小さく笑みが漏れる。本当に、気ままで大食いでのくせ、楽しい宇宙人だ……。

親愛なる宇宙人へ。

あなたの食べっぷりには、いつも目を見張ってしまいます。せめて、月のお菓子代を今の半分にして下さい。それから、やっぱり豆電球

は消して下さい。毎朝あなたの部屋を覗いて消すの、ちょっと面倒くさいです。後、朝の五時にベッドから飛び降りるの、止めて下さい。寿命が縮みます。軽く計算しました。私の寿命、平均年齢まで生きると仮定すると、後十七年位です。後五回飛び降りられたら、残り二年になります。その次に飛ばれたら、その日の内に心停止します。まだ死にたくありません。よろしく。大食いで、気ままに、時にわがままで怖くって。でも、お姉ちゃんはそんなあなたが大好きです。……こんなこと言ったら、気持ち悪い、って言われるんだろっな……。

(後書き)

こんにちは、霜月璃音です。基本ファンタジーだけのつもりでしたが、妹を見ていてどうしても書きたくなってしまいました。くだらない文章で申し訳ありません。

ここまでお読み下さった皆様、ありがとうございます。本業のファンタジーの連載の方も頑張っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2216/>

自称宇宙人の休日～餌は与えないで下さい～

2010年10月10日06時43分発行